

# 記念大会に思い

今回の記念大会開催には、関係各位のご尽力がありました。ここにご協力をいただいたみなさんからの記念大会、学院、同窓会への熱い想いを掲載させていただきます。(写真はすべて記念祝賀会の時のものです)

## 大垣真宗学院に育てられて



学院指導主任補

飯山 等

(一九七一年卒 大垣教区)

京都から車を走らせ、教務所のロビーに入る。今日も熱い声が扉の向こうから聞こえてくる。記念大会も間近になったある日。

もう何度目の集まりであろうか。実行委員、誰もが多用な身でありながら、何の見返りを求めずに集い、熱い情いをぶつけ合う。遅れてその一員として参画するようになった私に、今日もまた眩しい時が展開する。「しなければならぬ」という責務ではなく、「せざるにいらぬ」という篤い欲願が充溢する。……大垣真宗学院に育てられて私、との感慨が熱くこみ上げてくる。

一九六九(昭和四十四)年、大学一年生十九歳の夏、私もこの学院に身を置いた。何の想定も、期するものもなく。そして鷹橋先生に会い、真宗の活力を知った。抗いがたい生気を感じた。中途な理解をもって足れりとし、なるほどと決着させてしま

うことに居たたまれず、大谷大学大学院に。そこで広瀬先生に遇った。どこまでも我が身に徹する学びの厳しさと、私的に閉じない学びの公開性を胸に刻んだ。(略)

真宗学院で授業を担当するようになって三十五年超になろうとする。ほぼ百パーセント怠慢への言い訳だが、きっちり計画立てて講ずることができない。向き合っている皆さんが引き出してくださる。それに甘えてはいけなく強く思う、その一方で、心底ありがたい、人生の賜りもの、わたしを研いでくれる場である、と。学院は、わたしを固化・閉塞・風化・停滞させない、圧倒的な力用である。

六月八日の記念総会、よかったよ。でも、来集された皆さんともっともっと話しをしたかった。語り合いたかった。

そして、その「とき」を共にできなかった方に、「つきはせひ」と言いたい。大切な深い思いを賜ったから、いつまでも尊くかけがえのないものとしてあり続ける。確かにそうであろう。しかし、卒してのち身を運び、その場に、その時に身を置くことを度重ねることによって、その時その場があらためて豊かな時空として耕される。新たに肥沃な大地として創成される。でもあろう、と。きょう書店で手に



取り、目に飛び込んできた一節。  
「私たちにとってほんとうに見るのが難しいのは、実は見えづらいものではないのかもしれない。すぐそこにあるもの。よく見えるもの。それが、目を凝らしてもなかなか見えてこないということがある。(中略)目を凝らすことでやっと見えるものがある一方で、眺めれば眺めるほど見えなくなるものがある。より難しいのは後者との付き合いなのかもしれない。」(『文学をへ凝視する』阿部公彦著)

記念大会に参加して、長年にわたる同窓生が一堂に会することができました。地域を越えて、年齢を超えて出遇えることの不思議さを改めて感じます。

私にとって真宗を学ぶ最初のご縁が大垣真宗学院でした。同窓会発足以来、徐々に活動も広がり、現在の在学院生との交流も「上山奉仕研修」で実現しました。これからも皆さん、大いに同窓会の行事に参加しませんか。



初代同窓会長 一九七一年卒

長浜教区 佐藤 義成

「大垣真宗学院が創立されて六十年になる」と聞いて、戦後まだ間もない時期に大谷派教師となる為の勉強の場が創られた事、また、この間の卒業生が七百人、と聞くとそれに関わった多くの方々のその為の様々な情熱を感じない訳には行きませんでした。



この記念大会をご縁に更に次へとつなぐためにも盛り上がった会に！と言うことで、学院の先生方にも様々なご協力を頂き感謝申し上げます。幸い、長谷正當先生には弥陀の本願の根本をキチッと押さえて頂き、又A J Iの方には多くの讃歌を歌って頂き、大変盛り上がり、メリハリのある会になりました。

また一日も早く、皆が何時でも自由に集える場所、学院新校舎が実現することを切に願っています。

同窓会副会長 一九九六年卒  
大垣教区 児玉 俊雄

「毎年同窓会の御案内を頂いていたけれども中々都合が悪く、出席出来なかったが、今年は記念大会ということでやっと参加出来ました。」と、同じ教区でありながら会話もしたことがなかった方と、「同窓生」という共通な繋がりのお蔭で、

ご縁を頂くことが出来、私には良き思い出となった記念大会でした。

同窓会副会長 岐阜教区  
一九九六年卒 小笠原まや

真宗学院創立六十年・同窓会発足五周年記念大会は、音楽法要に始まる総会、長谷正當先生の記念講演、素晴らしいA J Iの歌声による懇親会と、最高！でした。実は当日、私は受付の担当だったので、総会などには出られなかったのですが、後日、長谷先生の「宿業の世界に弥陀の本願が働き本願力になる」



講義をお聞きし、内容の深さに身が震えました。諸先生方や学院仲間の後押しされ、記念大会のご縁をいただけたこと心より感謝いたします。

一九八七年卒 長浜教区 三山 凉子

真宗学院を卒業して十数年。同窓会に出席していただくために久しぶりに同窓生に連絡をしました。そして当日には何人かの同期の方に会うことができました。卒業してからの日々の長さを思うと、それぞれが各寺でいろんな経験を積み重ねたことが分かりました。学院の時には頼って助けて

いただいた方々と私は現在同じ年になってしまいました。大きな存在のままのお姿にお会いできたことを嬉しく思いました。

一九九九年卒 大垣教区 傍島 仁美

昨年末より同窓会のお手伝いをさせて頂いていただいています。

学院在学中に生まれた末娘が、たまたま記念懇親会の会場でアルバイトしており、先生方や同期の方々に成長した姿を見ていただくことができました。「A J I」のコンサートも一緒に楽しんでいました。年月を感じました。

一九九六年卒 大垣教区 稲葉 厚子



突っ張って、斜に構えて歩んできた十代。今に見ておれと意地だけで歩んだ二十代。きれいごとだけにしか受け止められなかった仏さまからの言葉、それでも親にさせてもらえた三十代。愚痴ばかりの四十代。やっと聖典のことばに出遇えた五十代。そして仲間との出逢いと良き師との出遇いを歩むことのできた六十代。七十代を目の前にし、私は、今、ここに居られることへの喜びと感謝を、また、気づかされている。

当たり前でなかった。というこも。

いのちの期限を宣告された兄が、幼い頃からの思い出を病室のベッドで語ってくれる。

四人の子どもをつれ、再々婚の道を選んだ母は、四十二才の高齢で新しい父との間に、死を覚悟して私を産んでくれたという。

終戦後は生きるために必要な手段のひとつだったのだから。貧しかった生活、友に見せなくなかった老いた父と母の姿、いじめの毎日。思い描く生活との違いが私を世間でいう見事な「ひねくれ者」へと育てていった。感謝なんて無縁のまま。

今、兄が言う。「お前をこの世に出してくれた思いを忘れずに大切に生きてくれよ」と。

腹の底からの願われている声が私に響く。ああ、こんな尊い仲間にも願われている身であることを知らされ、それをいつも当たり前として来てしまっている。この涙は、決して一生、私の心にとどめておきたい。

そして今、出遇ってくれたすべての人たちに、「ありがとう」を伝えたい。

こんな私に出遇ってくれてありがとう、と。

一九九九年卒 高山教区 窪田 和枝



同窓会も五年という年月を重ねました。人生から見れば幼児の段階かも知れませんが私にとって、学院は浄土真宗の入り口に立つ第一歩でした。そして仏教に遇う最初の教えの場でありました。学院を卒業してからも何かと連絡をいただき、皆さまとのふれあいの機会を作ってください、先生方も無知な私に隔てなく接していただきました。その後、同窓会を設立するというお話しを聞き、大変うれしく思い、入会いたしました。還り見れば、短い五年間かもしれませんが、私にとっては人生の方向、おおげさに言えば白い道を決断する時でありました。

もっと教えにふれたいとの思いで、同朋大学の仏教学科に入り、今年三月に卒業しましたが、先生にお願いして大学院で勉強しております。今まさに、教えの広さ、教えの深さを実感しております。私自身、罪福心のかたまりで、親鸞聖人の言われる蛇蝎の身であります。この私が救われるのは名号一つ。終生、救われる道を求め続けたい。そのためにも大垣真宗学院にて多くの友、よき師に恵まれ、同窓会が末永く続き、ご縁をいただくことのみでございます。

二〇〇五年卒 岐阜教区 後藤 昭子



たくさんの方々のご参加とご協力により、記念大会を無事に終えることができました。深く感謝します。本年は役員一年目の私にとって、忘れられない出深い年になりました。記念ライブでは「A J I」の美しい歌声に年甲斐もなくときめき、心がひきつけられました。世代を超えた楽しい時間に出遇わせていただきました。改めて学院の歩みとその意義、そして学院に関わる方々の熱意を感じる事ができました。今後も学院での出遇いを大切にしていきたいと思っております。

二〇〇五年卒 大垣教区 堀 康子



今回大垣真宗学院の記念大会がもたらしたことは大変うれしいことでした。同窓会発足以来、いろいろと先生方や役員様にお世話になり、今回の記念行事を計画いたしました。なかなか思うようには進まない面もありました。

当日の式典に音楽法要を取り入れることになりましたが練習する時間もなく、いきなり本番のようになりましたが、導師さんや皆様のご協力により、なんとか形を保つことができました。また、当日の記念品「念珠ストラップ」は長浜支部の女性七人が何度も集まって四百個作ったものです。

長浜支部では初代同窓会長の佐藤義成さんを中心に毎月学習会を開いて親縁や親鸞聖人の法語集などを分かりやすく説いていただき、なごやかな雰囲気です。

二〇〇七年卒 長浜教区 海北 誓子

学院を卒業したときにこの同窓会が発足しました。最初の打ち合わせの時、初めてお会いする方々に緊張したのを覚えています。ずいぶん遠くから打ち合わせのために足を運んで下さっています。

二〇〇七年二月、学院の卒業生・学院性と呼び掛けられたインドの旅に参加した時、現在の高垣会長と初めてお会いしました。二〇〇八年にもインド旅行が行われ、

この時に同窓会の話が持ち上がり、順調に発足されました。

今回、同窓会はまた六回目ですが、学院の歴史にはとても重いものを感じ、最初に預かった名簿の人数の多さに驚いたことを思い出します。多くの出会いを楽しみにこの会のお手伝いをさせていただいています。



二〇〇八年卒 大垣教区 杉原 光子

## 学院トピックス

### 同窓会上山奉仕団

学院同窓会は八月二十九、三十、三十一日の三日間、学院の上山研修に合わせて、同窓会奉仕団として上山しました。昨年同様、同窓会で一班を作り、鷹橋賢由先生に班担をしていただきました。

今回の講師は、アメリカで布教活動を続けておられる羽田信生先生（バークレー毎田仏教センター所長）で、「二河白道—人間成就における二つの危機」のテーマで講義を受けました。写真。アメリカ仕込みの大変エネルギーな白熱した講義で、二河白道の構造と仏道を歩む意義を、丁寧に話していただき、真宗の学びを深めることができました。

また、夜には先生方、学院生とともに懇親会が催され、車座になって和やかに仏法談義が行われました。

来年度も上山研修を企画します。総会とともにご案内させていただきます。多くのご参加を期待しております。



### 同窓会が掲示板を寄贈しました

学院生の勉強環境の整備に役立ててと、学院同窓会はこのほど、新しい掲示板一基を寄贈しました。写真。学院の掲示板は長年、移動式の小さなものが玄関付近に置かれて連絡事項に使われていましたが、見づらいものでした。

新しい掲示板は、縦一メートル、横一・八メートルの壁面固定の立派なホワイトボードです。贈呈式で高垣康平会長は「貧者の一灯ですが、ご利用下されば幸いです」と海老原章学院長に目録を手渡しました。学院生からも「授業の日程や変更など、とても見やすくなった」と好評をいただいています。



### 第七回総会のご案内

記念大会は紙面の通り、大変な盛況となりました。同窓会役員一同、重ねて御礼申し上げます。皆様からの大きなお力をいただきました。今回の成功をバネにこれからも益々、充実した同窓会活動になるよう努力してゆきますので、どうぞお力添えを宜しくお願いいたします。

第七回総会は六月七日（土）を予定しております。近くなりましたらご案内申し上げますので、ふるってご参加ください。